

第 51 回語学ゼミナール報告

今回の語学ゼミナールは Von der Konstruktionsgrammatik zu einem (FrameNet-) Konstruktikon を総合テーマとし、デュッセルドルフ大学の Alexander Ziem 教授を招いて、2025 年 8 月 19 日（火）～8 月 22 日（金）の 4 日間の日程で、kokoka 京都市国際交流会館にて行われた。今回は久々に京都での開催となった。アジアゲストとしては、韓国の大慶女子大学の Young Eun Jhee 教授に参加いただくことができた。ゼミナールの参加者および期間中のプログラムは以下のとおりである：

招待講師： Prof. Dr. Alexander Ziem (Heinrich-Heine-Universität Düsseldorf)

アジアゲスト： Prof. Dr. Young Eun Jhee (Chonnam National University)

一般参加者（姓のアルファベット順）：

*大喜祐太（関西学院大学），出島恒太郎（学習院大学・大学院生），箸本里菜（学習院大学・大学院生），池田裕行（東京外国語大学・大学院生），池田圭佑（東京外国語大学・大学院生），稻葉次朗（東京大学），井坂ゆかり（大阪大学），板倉歌（日本大学），伊藤克将（大阪公立大学），伊藤港（学習院大学・大学院生），城山月花（東京大学・大学院生），覚知頌春（大阪大学），Kim Jiwon (Seoul Women's University)，小林大志（東北大学），*薦田奈美（同志社大学），小西優葉（上智大学・大学院生），Koo Myung-Chul (Seoul National University)，Lee Yongjun (Seoul National University・大学院生)，**宮下博幸（関西学院大学），室井禎之（早稲田大学），中西志門（三重大学），成田節（東京外国語大学），仁科陽江（広島大学），*信國萌（大阪公立大学），沼畠向穂（東京外国語大学・大学院生），*小川敦（法政大学），岡野伸哉（東京大学），清野智昭（学習院大学），田中雅敏（学習院大学），時田伊津子（日本大学），筒井友弥（京都外国語大学），若井田雅仁（広島大学・大学院生），横田詩織（慶應義塾大学・大学院生），米村茉梨（慶應義塾大学・大学院生）

**実行委員長，*実行委員

プログラム：

8 月 19 日 14:00-16:30 開会，Ziem 教授講演 I

8月20日 9:30-12:00 Ziem教授講演II
13:20-16:35 一般研究発表I

8月21日 9:30-12:00 Ziem教授講演III
13:20-16:20 一般研究発表II
18:00-20:00 懇親会

8月22日 9:30-11:15 ワークショップ
11:30-13:00 Ziem教授の講演に関するディスカッション

今回は若手参加者が例年に増して多く、一般参加者34名のうち、三分の一を超える12名が大学院生であった。またアジアゲストのJhee教授の他に、韓国独文学会から2名の教員、1名の大学院生の一般参加者を迎えた。

次に招待講師の講演内容について報告する。Ziem教授の第1講演は、*Zehn Schritte zur Entwicklung und Implementierung eines Konstruktikons*と題され、初日の午後に行われた。まず講演全体の出発点として、認知言語学の基本的な前提である、語彙と文法を連続体として見る立場(*Lexikon-Grammatik-Kontinuum*)が導入された。この立場からすると、伝統的な「語彙=単語のリスト」「文法=規則体系」という区別は人工的であるとされ、実際には、言語は非スキーマ的な単位から高度にスキーマ化された単位まで連続的に広がる構造をもつと仮定される。またこの立場に立つと、伝統的には扱われることの少なかつた慣用句や定型表現などのフレーズ単位も、語彙や文法と同様に扱われることになる。さらなる基本前提として、構文文法(*Konstruktionsgrammatik*)における構文の概念が導入された。構文とは形式と意味が結びついたあらゆる言語単位であり、形式・意味・機能・語用論的情報を含む詳細な項目として記述される。またフレーム(特にフィルモアらの開発したFrameNet)は構文の意味構造を記述する枠組みとみなすことができ、両者を統合することで、さまざまな構文を構文目録(*Konstruktikon*)として体系的に記述するという発想が生まれる。Ziem教授は2018年からこのドイツ語の構文目録を記述するプロジェクトを率いており、フレームとドイツ語の構文を大規模に収集・分析し、ネットワークとして統合したデジタル構文目録の構築を行っている。以降の講演では、この構文目録を構築する際の10のステップが紹介された。ステップ1~5は基盤インフラの構築であり、具体的にはデータベース、アノテーションツールの設計といったインフ

ラ設計, フィルモアらが構築した構文目録のドイツ語への置き換え, n-gram を用いた新しいコンストラクション候補の半自動的抽出, 文・テキストに対する意味・構文情報の付与やコロケーションプロファイルの生成, BERT などを用いた構文要素の典型的な語彙充填の分析が挙げられた。ステップ 6~10 はさらなる拡張と統合の段階であり, 形式・意味・機能に基づく構文間の家族的類似性の整理, FrameNet のフレーム要素 (FE) と構文要素 (KE) の対応づけ, 概念メタファーの構文目録への統合 (CoMetNet), 新規フレーム・語彙要素の自動抽出, ネットワークの可視化ツールの開発が挙げられた。全体として, 言語は「規則の集合」ではなく, 相互に関連し合う構文の巨大ネットワークであり, 構文目録はそのネットワークをデータに基づいて記述し, 可視化し, 体系化する試みであるとされる。またフレームネットと構文目録は補完関係にあり, 両者を統合することで言語の内部構造がより明確になることが示された。

二日目午前に行われた第 2 講演の題目は, Konstruktionen und Frames: (sprachliche) Bedeutungen analysieren und dokumentieren であった。まず導入として指摘されたのは, 言語には多様な意味を持つ構文が大量に存在することである。言語の基本単位は形式と意味のペアである構文であるが, それぞれのスキーマ性・生産性・制約の度合いはさまざまに異なる。このような多様性をつなぐ働きをするのがフレームである。フレームは言語表現の意味の骨格であり, フィルモアによって提案された FrameNet は, フレームの観点から言語の意味をネットワーク的に記述する枠組みである。FrameNet にはフレームの定義, フレーム要素, フレーム間関係, フレームを喚起する語彙のリストなどの記述がなされる。この枠組みを前提に, FrameNet と構文目録をどのように統合するかという点が扱われた。基本的には, 構文には構文がとる構文要素 (KE) があり, それがフレーム要素 (FE) に対応する形で両者が統合されると考えられる。語彙構文に関してはすでにこのような捉え方がなされてきたが, 文法構文も同じように捉えられるとされる。この立場に立つなら, 語彙表現から文法表現までの連続性をなす言語形式は, 同一のフレームに基づいて把握することが可能であることになる。この一例として挙げられたのが量のフレーム (quantifizierte Menge) であり, このフレームを喚起する要素 (Frame evoking Element: FEE) としては例えば *ein bisschen*, *ein paar* のような語彙形式, *N über N*, *ADJ-er als ADJ* のようなフレーズ, さら

には複数の *Blumen* における形態素-n などがあり、これらのスキーマ性の異なる言語表現が、同一の量のフレームを喚起するものとして理解されることが示された。しかし FrameNet と構文目録を統合する際の問題点も存在する。例えば *Er arbeitet sich durch die Akten* のような再帰移動構文を扱う際には、移動構文と *arbeiten* が喚起するフレームのように、二つ以上のフレームが関与する場合がある。また *Es war er, der die Tür öffnete.* のような強調構文の意味を把握するようなフレームが存在しないといった問題や、FrameNet におけるフレーム要素が構文要素と一致しない問題もあるとされた（例：*der Tag der Tage*）。またさらなる課題として、記述対象となる構文はいったいいくつかあるのか、どの構文を構文目録に含めるべきか、誰のための構文目録を構築するのか、構文を同定し記述するためにどんなツールや方法が必要か、などがある。最後に講演は母音伸長による量化構文 “Heeeeerzlichen Dank!” で締めくくられた。

三日目午前の最終講演は、*Das Konstruktikon des Deutschen als dynamisches Netzwerk: sprachdidaktische und computationelle Anwendungsperspektiven* と題され、Ziem 教授らによって構築された FrameNet+ ドイツ語構文目録の応用可能性がテーマとなった。まず構文目録とは何かという点についての確認が行われた。構文目録とは、言語における形式と意味のペアである構文を体系的に記述し、相互に関連づけたデジタルリソースである。現状（2025 年）では 855 の構文項目と 176 の構文ファミリー、7218 の構文間関係、1010 の構文・フレーム関係が同定されているという。これらはまず FrameNet のフレームの情報と並んで、研究リソースや情報プラットフォームとしての応用が可能である。また構文目録には構文のネットワークを可視化するツールが含まれているため、ある構文を取り巻くネットワーク構造を可視化して理解することができる。さらに多言語リソースとしての応用を考えられる。クロフト（2022）は特定の言語から独立した構文間をリンクする通言語的な概念として「比較概念（Comparative Concepts）」を提案している。この比較概念により、ドイツ語の構文と異なる言語の構文との対応関係を理解したり、またドイツ語の構文を比較概念の観点から体系づけたりすることが可能となることが示された。他の応用領域としては、専門語（Fachsprache）の学習者のための構文目録の活用が挙げられる。専門語においては通常の構文が支配的であるものの、専門語特有の構文がある可能性や、通常の構文とともに専門用語

が用いられたりもする。またどんな特定の構文が専門語に出現しやすいかも統計的に計量可能である（候補としては受動構文や *lassen* 構文など）。専門語ではまた対象者によってどんな内容が必要になるかが異なる。さらに専門領域に特化したフレームが存在するかという点も問題となる。最後に言語学習者のための構文目録の利用が扱われた。応用は「教授する」「調べる」「学習を深める」といったそれぞれのレベルで可能であるとされ、構文目録の教授法的なリソースとしての活用の可能性が説明された。活用にあたっては現行の構文目録にある定義、構文要素、使用条件等の単純化が必要となることが、ADJ-er als NP 構文を例に示された。また構文目録に挙げられている作例（初学者向き）や実際の用例（上級者向き）は、穴をあけて練習問題として利用することが可能である。さらに CEFR のどのレベルで構文目録のどの構文を教授するかという点に関して手作業で選定を行う場合と、ChatGPT を利用する場合の利点と問題点についても言及された。最後に今後の展望として、構文を自動的に抽出する構文パーサの開発や、学習者に合わせた構文やフレームの充実、標準ドイツ語とは異なる言語変種の考慮などが挙げられ、講演が締めくくられた。なお Ziem 教授のプロジェクトが開発した FrameNet 構文目録は以下で利用可能である：
<https://framenet-constructicon.hhu.de/>

以上の 3 つの講演を通じて、FrameNet と組み合わせる形で発展したドイツ語の構文目録とはどのようなものであるか、またドイツ語構文目録が研究、多言語比較、自然言語処理（NLP）、言語教育に応用可能な柔軟で強力な言語資源であることが示され、Ziem 教授らによる最新の研究ならびに実践的な成果に触れる機会となった。

講演中は Ziem 教授が講演の区切りごとに質疑の機会を設けてくれたこともあり、和やかな雰囲気の中、活発な質疑応答が行われた。また講演後またその他の機会の質疑にも快く応じていただいた。

今回は初日の開会前に 30 分ほどの自己紹介の時間を設けた。参加者の中には初めて語学ゼミナールに参加する方もいたため、まず自己紹介を通じてお互いについて知っておく方が望ましいであろうとの判断からである。初めて参加する大学院生にはウォーミングアップとしてちょうどよい機会となったと思われる。今後も継続していきたい。ゼミナールの 2~3 日目には、アジアゲストの Young Eun Jhee 教授の講演ならびに一般参加者による計 12 本の発表が行われた。これらの発表においても質疑応答が活発に行われ、また Ziem 教授からも有益なコメ

ントやアドバイスがあった。ゼミナール3日目の午前にはZiem教授による3つの講演内容を取り上げるワークショップが日本語で行われた。ワークショップでは大学院生を中心に講演内容に関する疑問点や質問がまとめられ、引き続きZiem教授を交えてディスカッションが行われた。これは大学院生だけでなく、参加者全体が講演内容をさらに深く理解する有意義な場となった。

今回は語学ゼミナールが合宿形式をとらなくなって今回で3回目になるが、これまでと同様、語学ゼミらしい打ち解けた雰囲気を保つつ、成功裡に終了することができた。招待講師のZiem教授をはじめ、参加者各位、担当理事、ならびに日頃より語学ゼミナールの活動を支援してくださっている学会員のみなさまに、この場をお借りして改めて感謝申し上げたい。ゼミナール開催にあたっては、今回もDAADとドイツ語学文学振興会に多大なご支援を賜った。ここに記して謝意を示したい。

(文責：宮下博幸)